

エリザベス・ギャスケル作

「リビー・マーシュの三つの祭日」

松岡光治訳

第一の祭日 聖ヴァレンタイン祭

一昨年の十一月のことである。私たちの近所で引越しのようなものがあつたが、それはどう見ても引越しとは言えなかつた。たつた一人の少女がある場所から別の場所へ住まいを移しただけなのだから。引越しと言えば、たんす、籠、食器台、^{ドレッサー}ベッドを荷馬車いっぽいに積み込み、天辺には大きな古時計をくくりつけるのが普通だが、今回は木製の収納箱がたつた一個だけ、娘のあとから運ばれていたにすぎなかつた。娘の方は肉体的にというよりは精神的に元気がなく、ものうげに、ゆつくりと重い足取りで通りを歩いていた。この娘の名前はリビー・マーシュ。今まで一緒に住んでいた知り合いたちがマンチエスターを離れることになり、彼女もディーン通り(二)の下宿を出て行かざるを得なくなつたのである。

彼女は、今度の下宿が街中からかなり離れていて、しかも大家さん夫婦が立派な人らしいというので、自分は幸運なのだと思うよう努めていた。事実、満足しようと努めたのだが、そうした理性的な判断にもかかわらず、いつもの心細い感じに襲われた。またしても、まつたくの赤の他人の中へ、今まさに放り込まれようとしていたからである。

アルベマール通り(二)××横丁二番地にやつと到着した。リビーはゆつくりと歩いてきたのだが、収納箱を運んでくれた男と別れる地点に近づくと、その歩調がさらにゆるまつた。というのは、この男は知り合つたばかりであつたが、家の開いたドアから顔を出して、「ディクソン家の新しい下宿人」はあいつに違ひないと思っている横丁の連中に比べれば、赤の他人とは言えなかつたからだ。

ディクソンの家は横丁の左側の奥にあり、真向かいの家とは出入り口のない、高いレンガの壁でつながっている。横丁の住居はすべて同じ単調な建築様式。片方の家が反対側にある瓜二つのもう片方の家と向き合っている様子は、まるで鏡に映った自分の姿を見ているかのようであった。

ディクソンの家は閉まつていて、鍵は隣の家に預けられていた。鍵を預かっている隣の女は、リビーが来るのを知っていたようで、応対に出て少し説明してからドアを開けてやり、炉格子で活気なく燃えていた鈍い灰色の石炭殻をかき立てる。さつさと自分の家へ戻ってしまった。可哀想に、独りぼつねんとリビーはあとに残され、居間の床の中央には例の収納箱が置いてあるだけだった。止めどなく流れる涙を抑えるのに役立つような言葉を——このように単調な静けさよりはましな、ありきたりの言葉でさえ——かけてくれる人間は、そこには誰もいなかった。

ディクソン夫妻とその長女は工場で働いていて、昼間はずつと家にいなかつた。下の子供はこれまた女の子だ。まだ幼かつたので、平日は家のドアの鍵と一緒に隣の家に預けられ、食事をさせてもらつていた。この子は、リビーがやつて来たとき、横丁の入口付近でせつせと泥の饅頭を作つて遊んでいたが、両親の新しい下宿人に関心を持つにはまだ幼すぎたようだ。この子の姉と同じ表側の部屋で一緒に寝起きすることは、あらかじめリビーにも分

かっていた。しかしながら、梯子のような急階段を昇つて二階へ案内してくれる人間は誰も家にはいない。それで、想像にかたくないことだが、自分で二階へ行つて外套を脱ぐのは、厚かましいようと思えた。仕方なく婦人帽を脱いでから座り、やつと炎を出して燃え始めていた暖炉の火を見つめていると、悲しい過去のことと、そしてこの広い世界で自分が天涯孤独の身になつたことしか考えられなくなつた。父と母はすでに亡くなつていて。弟もずいぶん前に死んでいる。今も生きておれば、弟はもう十九になつてゐるはずだ。とはいへ、彼女が弟のことを考へる時はいつも、いとしい赤ちゃんとしてだけである。リビーの唯一の友だちは——友だちと呼ぶことができればの話だが——今では遠く離れた別の家に住んでいる。雇い主たちも彼らなりに親切ではあるが、この気ぜわしい社会の中で右往左往しながら働くのに忙しすぎて、化粧着を裏返してリフォームさせたり、カーペットの修繕をさせたり、家庭用のリンネル類の縫いをさせたい時を除いて、お針子の少女のことなどを考へてやる余裕もなかつた。それで、リビーはいつか将来は自分自身も愛し愛され、女にとつて一番大切な務めを果たせる家庭が持てるという明るい未来像で元気の出るようないふい娘が心の中に秘めているような——自然な気持ちでさえ、ほとんど持てなくなつていた。

リビーはとても器量が悪かつた。そのことは昔から自覺してい

たので、それで屈辱を感じるようなことはなくなっていた。彼女のようにマンチエスターに住んでいる人間は、多少は自分の容姿について意識せざるを得なかつた。実際に、工場で働いている若者たちは、容姿についての関心が非常に高い。仕事が終わる時刻に工場からどつと溢れ出てくる連中を見れば、間違いなく、真実味のある話をたくさん聞くことができるだろう。その中には、失礼ながらも面白おかしい意図を兼ね備えたものがあり、たとえ自分に対する冗談であつても、笑いを禁じ得ないほどだ。リビーがしばしば浴びせられた質問は——「ずいぶん昔は美人だつたなんて抜かすんじゃあるめえな?」とか、「おめえの役目は、日がな一日、畑の真ん中で鳥を脅して追い払うことぢやねえのか?」とかいつものだつたので、自分の容貌のことでのか未練がましい感情を抱くこともなくなつていた。

このようにリビーが空想によつて様々な場面を思い起こしながら、考え込んで静かに泣いていると、デイクソン家の人たちが不意に帰宅した。わなわなと唇を震わせて頬を涙で濡らしていた彼女は驚いてしまつた。

リビーは、一時間前まで自分に重苦しい感じを与えていた、あの静寂を取り戻したい気になりかけた。デイクソン家の人们は話すのも笑うのも大声で、することなすこと全部が大騒ぎだつたからである。デイクソンはリビーの収納箱に付いていた鉄の取つ

手を握り、彼女が二階へ運ぶのを手伝つてくれた。娘のアンも荷ほどきを見ようと続いて二階にやつて來た。「お針子さんが持つてゐる」衣裳がどんなものか知りたい様子だつた。デイクソン夫人はガチャガチャと音を立てながら茶道具を出して、薬缶を火にかけた。下の娘も隣の家から戻ってきたので、さらに騒がしくなつた。それから、夫人はアンを階下へ呼び、あれこれと食べ物を買ひに行かせた。とても水っぽいクリームに加える卵とか、バター付きパンに風味を添えるハムとか、(買うことができれば)の話だが焼きたての新しいパンとかである。リビーは、これらの命令をデイクソン夫人が声を十分に高めて発しているのを聞き、この前まで自分が下宿していた家の食習慣と雲泥の差がある彼らの贅沢ぶりに驚いた。しかし、彼らは熟練した紡績工で、賃金をしこたまもらつていたし、華氏七十五度から八十度^(三)にもなる環境の中に昼間ずっと閉じ込められているのだ。質素な食事に対する自然で健全な欲求を完全になくしてしまい、食事以上に高尚な趣味もなかつたので、そうした贅沢な食事に最高の喜びを見出していたのである。

ティーの準備ができると、リビーは階下へ呼ばれ、一緒に食事をしないかという(荒っぽいが)心のこもつた招待を受けた。彼女が押し黙つて茶卓の片隅に座つてみると、デイクソン家の人々は自分たちだけで会話を続けていた。その内容や言及される人々

についてはチンパンカンパンだったので、とうとうリビーは勇気を出してローソクを所望し、就寝前に荷ほどきを済ませに行つた。明日からは数日間連続して縫い物の仕事に出かけねばならないのだ。しかし、比較的静かな自分の部屋へ移ると、急に元気が出なくなつたので、ノアの箱船^(四)のよつた収納箱に錠前をかけるだけで満足した。そして、ローソクを消して窓辺に座り、明るい夜空をじっと眺めた。「すべてを包む蒼穹」^(五)は、その深奥を星がゆっくりと絶え間なく進んで行く莊厳な時刻に、悲哀に満ちた人々に對して憐れみの光を注いでくれていた。

やがて、視線を下に向けたりビーは、横丁の路地をはさんで彼女の部屋の窓と対面している真向かいの部屋の窓を凝視した。部屋には明かりがともつていて、ブラインドが下ろされている。彼女が何気なくブラインドに目をやると、最初その上に見えたのは絶えず難儀そうに動いている幽霊のような小さい影であった。それは子供の手と腕——以外の何物でもない。その腕が鈍痛の大きな波動と拍子を合わせるかのように上下運動している間は、手首から長細い指がだらりと垂れているのが見えた。一刻も早く眠り込んで、あの絶え間ない、弱々しい動きが静まればいいのに、彼女は思わずいられなかつた。すると実際に、少年が疲労困憊して眠りに陥つたみたいに、腕の動きが時おり止まつた。だが、ほどなくすると、突然的な激痛が走つたかのように、指を握りし

めた子供の手はぐいと持ち上げられた。大家の娘のアンが寝床にやつて来たとき、リビーはまだベッドに座つたままで、向かい側のブラインドの影を見つめていた。すぐに彼女は「あれは誰の影なの?」とアンに尋ねた。

「マーガレット・ホールの息子じやない? 去年の夏だつたかな、とつても暑くて我慢できんかつたんで、夜になつても窓を閉めんかったの。あつちの窓も開いとつたんで、あの子のうめき声が何度も聞こえてきてね。あたし、目を覚ましちやつた。寒い季節になつてから、ちょっとよくなつたみたいだけど」

「いつもベッドに寝てるの? 何の病氣かしら?」と、リビーは尋ねた。

「背骨がちよつと悪いって、みんなそう言つとるわ。なんだか、いい時もそうじやない時もあるみたい。あの子はホントにいい子だし、母親の方もそんなに悪い人じやないんだけど、ただ、あたしの母さんとあの子の母親が喧嘩しちやつてね。それで、今じや互いに口をきいとらんの、あたしたち」

リビーはずっと見つめていた。彼女がやつと口を開いて、あの子の母親はどんな人かしらと尋ねた時には、アン・ディイクソンはすでに熟睡していた。

それから月日が経過し、いつものように秘密のヴェールがはがされた。リビーに分かつたのは、マーガレット・ホールは未亡人

で洗濯女として生計を立てているということ、あの重苦にあえぐ少年は彼女が溺愛している一人っ子だということであった。この母親は息子以外のほとんど全員を誰彼の見境なく叱りつける癖があつたので、この界隈ではガミガミ女という評判が立つようになつたそうだ。しかしながら、彼女が息子に対し非常に優しくて情け深かつたことは事実である。母親が生計のために外で骨折つて働いている昼の間ずっと、息子は独りで小さなベッドに横たわっていた。リビーは、仕事のために外出する必要がなくて下宿で簡単な仕事をする時はいつも、自分の部屋の窓から外眺めていた。二つの物言わぬ影が向かい側のブラインドに映つて動くと、帰宅した母親が息子の上に身をかがめたり、枕を直してやつたり、姿勢を変えてやつたり、夜の紅茶を入れてやつたりするのが分かるのではないかと、リビーは思ったものである。そして、夜中になつても頻繁に、リビーはベッドからそっと起き上がり、彼が痛みで眠れない時によくしていたように、今夜も小さな腕を上下に振つているのではないかと思つて、確認せずにほれなかつた。

その年の冬は家でできる針仕事がたくさんあつた。指がかじかむほど寒くない時は、時たま（あまりないが）休憩する際に、リビーは少年の姿を見ようと針仕事をいつも二階へ持つて行つた。彼は、具合のよい日には、体を起こして窓の外を眺めることがで

きたし、リビーも彼が自分の姿を見たがつてゐるのに気づいていた。やがて彼女は路地をはさんだ向かいの少年に勇気を出して頷いてみせた。すると、少年はかすかに笑つて、すぐに頷き返してみたので、この行為をどうやら喜んでいるらしいことが分かつた。もし恐ろしい母親の存在がなかつたなら、この微笑に励まされてリビーはさらに話をすると柄へと進んでいただろう。しかし、彼女がディクソン家の下宿人であることは、彼の母親にとつて十分に胸糞が悪いことだつた。彼の母親は、鉢合わせした時はいつも相手に当てつけを言つたり、何か悪口を言う機会はないものかと待ち伏せしている——そうしたこと見え見えの生活を送つていたのである。

リビーは、少年に絶え間なく関心を抱いているうちに、彼は夢中になれるものが全然ないということに気づいた。つまり、長い昼の間ずっと独りでいる時に、耐えがたい痛みから注意をそらすことのできるものがなかつたのだ。彼は花が大好きだった。リビーが今の下宿に引っ越してきた時は十一月だつたが、とても穏やかな気候だったので、花が少し庭にまだ残つていた。田舎の人たちは、そんな花を集めて花束を作り、市のたつ日にマンチエスターへ売りに来ていた。リビーが隣人になつた、まさにその日に彼の母親はミカエル祭の花^(デイジー)の束を息子のために買つていたので、その花束の推移を彼女は注意深く見守つていた。まず、彼は

口が壊れて蓋のなくなつた古い急須に花をさし、熱が出た際の喉の渴きをいやすため母親が彼のそばに置いてくれた水差しを使つて、毎日その急須に水を補充していた。やがて、ライラック色の星座のような花束が少しづつ色あせるようになり、それまで彼が愛撫せんばかりに見とれて過ごしていた時間は、花束の美しさを損なつてはいる枯れた花を切り取ることに費やされるようになつた。ハサミは古くて扱いにくく、彼の弱々しい動きも遅々としていたので、しおれてしまつた大切な花を切つて整えるのに午前中の半分がつぶれてしまつた。それでとうとう彼は残つた数少ない花を押し花として保存した方がよからうと考えたようである。花は古い聖書のページの間に慎重にはさまれた。それからとくに、この重い本を持ち上げができるほど体調のよい日はいつも、彼は押し花のページを開いて、まるで友だちのように眺めていたものだつた。なぜかと言うと、冬の間は育てたくても育てる生花がなかつたからである。

リビーが思案に暮れていると、ある考えがパツと頭にひらめいた。その後は、せつせと針を動かしていくと、顔には嬉しそうな忍び笑いがたびたび浮かび、彼女はそのことで淋しい冬の間もずっと元気づけられた。ディクソン家の人们は親切だったけれども、その考えがひらめくまで、彼女は実際ずっと淋しい冬を過ごしていたのだ。もつとも、針仕事がほとんどない週でも、彼ら

は家賃の支払いを決して強要しなかつたし、下宿で針仕事をする場合を考えて事前に取り決めていた家賃の支払いが少ないからと言つて、彼らが豪華な食事を渋つて彼女にとらせないこともなかつた。それは他のどこの下宿でも絶対に経験できないような贅沢な食事である。彼らは紅茶にラム酒(セ)を入れて飲むことを教えてくれ、「大丈夫、そんなもんは無料で結構」と言つてくれたものだ。しかし、彼らはとても気ぜわしく、羽振りもよく、自分自身のことばかりに心を奪っていたので、リビーの孤独感を取り除いてやることができなかつた。まだ彼女が言葉を交わしたこともない例の少年の（昼はその小さな顔の、夜はその影の）半分も取り除けなかつたのである。

リビーにひらめいた考えは次のようなものだつた。彼女の母は西イングランドの出身で、おそらく読者の皆さんのが御存じのように、そこでは聖ヴァレンタインの祭日（二月十四日）にプレゼントを贈る素敵な習慣がある。送り主の名は伏せるのが通例だが、プレゼントの楽しみの半分は、もちろん、そうした謎めいたところにある。それに、二月十四日はリビーの誕生日でもあつた。リビーが幸せだつた頃は毎年、彼女の母は何らかのプレゼントをして娘が一驚を喫するのを喜んでいた。毎年そのヴァレンタインの贈り物が届けられる方法は異なつていたものの、送り主が誰であるかについては、大体のところリビーには分かつていた。それ以来、幸福

だつた過去の記憶として彼女の脳裏に焼きついて離れないという理由で、二月十四日は一年で一番大切な日となつた。しかし、今年は彼女自身たゞ昔のように楽しい気分になれなくとも、他人の生活を明るいものにしてあげたいという気持ちになつた。金を貯めるのに爪に火をともすような生活になつても、何の喜びもなく苦しいだけの単調な生活を送つてゐる向かいの可哀想な少年のために、カナリヤと鳥籠を買ってあげようと思つたのである。

リビーの不安や恐怖、希望や数々の自己犠牲——おそらく寡婦の賽銭(さへん)としては有形の価値がほとんどないけれど、それでもなお（絶えず私たちの間を漂つてゐる）姿が見えない天使たちがちゃんと注目してくれて、目的を達成するまで生活に変化を与えてくれる行為——の全部を、今ここで読者諸氏に話してもよいだろう。彼女の目的は達成されたと言つてよい。まさに聖ヴァレンタインの祭日の前の日、彼女は時間を見つけて、アルベマール通りの近くに住んでいて鳴き鳥の仕入れで有名な散髪屋のところへ、半ギニー(一〇)を持って行つた。ありとあらゆることには、その善悪にかかわらず、マニアがいるものである。マンチエスターの織工には、簡単に信じることができないほど鳥について詳しく、関心も非常に高い者が多かつた。たいていの話題については頑固で、無口で、打ち解けない男たちであつても、彼らの顔をパツと明るくさせることは、そうした鳥の話題に触れさえすればよ

い。そうすれば、最近のカナリヤの品評会で誰が一等賞を獲得したか、その優勝した鳥を見るにはどこへ行けばよいか、すぐに彼らは教えてくれるだろう。また、お偉方の家畜の品評会を真似したような、滑稽だけれど、かわいらしくて面白い鳥の品評会の詳細について、すべて話してくれるだろう。そんな鳥の愛好家たちの中でも、散髪屋のエマニュエル・モリスは第一人者と目されてゐた。

彼はリビーを奥の小さな部屋へ案内した。そこは、ヒゲをそる時に石鹼の泡で飾り立てられた壯觀な自分の顔を店先で人目にさらしたくない、そういう内気な男専用の部屋であった。この部屋の四方には小枝で作った粗末な鳥籠が幾つも吊り下げてある。とはいへ、一等賞をとつた鳥だけは例外で、金メツキした針金製の鳥籠の榮に浴していた。外見上の美しさに関するかぎり、鳥の姿形が長くて細ければ、それだけ多くの賞賛を浴びた。これに加え、羽毛の色が濃くて澄んでおり、鳴き声が力強くて変化に富んでいる場合、その鳥の技能についてのエマニュエルの説明は、それだけ余計に詳しきなつた。しかしながら、これらはすべて賞を獲得した鳥の場合である。質問したあと、そうした鳥たちの値段が一ギニーから二ギニーだと聞かされたりビーは、少し気落ちしてしまつた。

「形や色については、あたし、あんまりうるさい人間じやあり

ません」と彼女は言つた。「鳴き声のいい鳥がほしい——それだけなんです！」

彼女に対するエマニュエルの評価が少しばかり下がつた。彼は鳴き声のいい鳥を幾つか見させてくれたが、それもリビーの手持ちの金では買えなかつた。

「やつぱり、あたし、大きな声で鳴く鳥は、あんまり好きじゃありません。だって、うるさいだけですし、うるさいとイライラする人たちが時にはいますからね」

「鳥の鳴き声なんぞでびびるような、そんな野郎は腰抜け(オッショウ)に決まつとる」

エマニュエルはかなり屈辱を感じてゐる様子であつた。
「体の弱い人にあげたいんです」と、リビーは申し訳なさそうに言つた。

「そうじやな」と答えた彼の口調は、その問題を熟考しているかのように聞こえた。「病弱な連中が、才能のある賢い奴よりか、愛情を示してくれる奴の方を好きになるつてのは、よくある話じゃ。ひょっとすると、お前さんは、こつちの奴がいいかもしけねえな」と彼は言いながら、ある鳥籠の扉を開けて、片隅でしょんぼりしていた単調な色の鳥を呼んだ。「おい——ジュピター、——ジュピター！」

ジュピターはすぐさま羽をなでつけ、小さな喜びの鳴き声を発

しながら、エマニュエルの方へ飛んできた。そして、まるでキスをするかのように、くちばしを彼の唇にあててから、彼の頭の上にとまり、嬉しそうにグルグルさえずり始めた。他の鳥たちのかつたが、この鳥の方がリビーには気に入ったようだつた。といふのは、いつも彼女は手の届かないブドウ(二二)よりも手に入るグズベリーの方がよいと思うような、そんな人間だつたからである。価格も適正だったので、彼女はその鳥籠を喜んで受け取り、家へ持つて帰るのに備えて外套の下に隠した。その間、エマニュエルは専門馬鹿ということもあつてか、鳥のエサについて事細かく指示を与えていた。

「すぐに誰でも分かつてくれるようになるかしら?」と彼女は尋ねた。

「二日だけ待つてみな。そうすりや、こいつとお前さんは今のかのように聞こえた。「病弱な連中が、才能のある賢い奴よりか、愛情を示してくれる奴の方を好きになるつてのは、よくある話じゃ。ひょっとすると、お前さんは、こつちの奴がいいかもしけねえな」と彼は言いながら、ある鳥籠の扉を開けて、片隅でしょんぼりしていた単調な色の鳥を呼んだ。「おい——ジュピター、——ジュピター！」

「この子の名前は何ですか? ちゃんと聞き取れなかつたんで

すが

「ジユピターじゃよ。珍しい名前じやが、この町にや、ボビー

やらデイキーやらがわんさといるんでな。それに、俺んとこの鳥たちはちよつと変わりもんみてえに思われとるんで、ましな名前をつけたいんじや。そんなわけで、せがれの学校の教科書から名前を幾つか選んだんじやよ。ジユピターの名前で呼ぶつたって、慣れちまえば、そんなこたあディキーと同じくれえ朝飯前じやねえか」

今まさに店を出ようとしていたリビーは、「ピーター（二三）つて呼ぶ方が、あたしには発音しやすいんですけど。ピーターでも反応してくれますよね？」と尋ねた。

「ひょつとするとな。じやが、三音節の名前の方が、すぐ反応するじやろうな」

聖ヴァレンタインの祭日に、ジユピターの鳥籠はぐるりとツタの葉っぱで飾られ、まるで小枝細工の籠に置かれた実にかわいい花冠のように見えた。その葉っぱの一枚には細長い紙がピンで留められていて、次のような言葉がリビーの円形書体で上手に書かれていた――

あなたの誠実な聖ヴァレンタインの恋人より。この子の名前がピーターであることに御注意あれ。しばらくその名で呼べば、反応して

くれますよ。

しかし、その日の午後、リビーは針仕事をほとんどしなかつた。プレゼントを彼女の聖ヴァレンタインの恋人のところまで運び、カナリヤを手渡して受取人が誰かを説明するや否や走り去ることになつていた、その使いの者が現れるのを今か今かと待つのに余念がなかつたからである。

とうとう使いの者がやつて來た。それから、下宿の雜役婦が力ナリヤを二階へ持つて上がるまで、しばらく間があつた。やがて、小さな顔がパツと輝いて明るく紅潮し、喜びと好奇心のあまり弱々しい手がぶるぶると震え、添え書きの内容を理解しようと（可哀想に、文字を読むことはできなかつたが）頭を下げるのがリビーには見えた。あらゆる角度からカナリヤを、つまり、頭、尻尾、翼、足を見るために、少年は有頂天になつて鳥籠をぐるぐると回していた。だが、ジユピターは再び知らない人たちの間に身を置いた不安からか、そんな少年の目的になかなか協力してくれなかつた。なぜなら、ジユピターは絶えず少年の正面へ自分の顔を向けようと、ぴょんぴょん跳びまわつていたからだ。これは少年を決して飽きさせない喜びの源泉となり、知らぬ間に日が暮れてしまつた。宝物を所有したことに対する嬉しさのあまり、彼は誰の贈り物だろうかと考えることを明らかに忘れてしまつたよ

うである。鳥を見せてもらった母親の暗い影がブラインドに映つたかと思うと、彼女が愛情のかぎりを尽くして、リビーの頭には浮かんだことがないようなことをしてやつてているのが——体を曲げてキスをし、親として子供と一緒に喜びを分かち合つているのが——見えた。

夜の間、カナリヤは小さなベッドと窓の間に置かれていた。リビーがいつものようにチラッと見るために起き上がりと、眠つている時でさえ新しい宝物を抱きしめているかのように、彼が大好きな鳥の入った籠を小さな腕で抱えている姿が見えた。この最初の晩に、ジュピター自身の寝つきはどうであつたか、それはまた別問題である。

このようにして最後の年におけるリビーの三つの祭日の第一日が終わつた。

第二の祭日 聖靈降臨祭

アルベマール通り××横丁二番地では、早朝の五時でさえ、過去何年もの六月の真昼と同じように、この上なく強烈で明るい陽光が降り注いでいた。

横丁の路地は人の声や笑いで明るく活氣を呈しているように見えた。寝室の窓は広く開け放たれ、熱気のために夜もずっとそう

されていた。時にはシャツ姿の男が頭と両肩を窓からひよいと出しているのを目にするかもしれないし、時には次のような質問が一方からもう一方へ發せられるの耳にするかもしれない。

「ところで、ジャック、おめえはどこへ行くんじやね?」

「ダナム〔四〕さ!」

「へえ、古くせえ奴だな、おめえも。おめえの爺さんも、昔はダナムへ行つてたじやねえか。じゃが、そういうや、おめえは万事旧式な男じやつたな。俺はオールダリー〔五〕に行くぞ——カミさんと一緒にな」

「ああ、そいつは、おめえ、カミさんしかおらんからじやよ。ガキが四人できるまで待つてみな、俺みてえに。そうすりや、おめえ、確かに古くせえが、一人あたり四ペンスでダナムに連れて行けりや、そんだけ御の字だつて、そう思つぜ」

「それでも、俺はオールダリーに行くからな。ガキどもなんぞに煩わされてたまるもんかつてんだ。家にじつとさせときやええんじや」

この最後の言葉が発せられるや、男の目には見えない二つの手がにゅつと現れ、その手の持ち主がふざけた態度ながらも非常に猛烈に、男の横っ面をひっぱたいた。隣人たちは、この目に見えぬ敵からの攻撃に尻毛を抜かれてしまつた男の顔を見て、全員どつと笑つた。そこで、男と今まで話をしていた相手の男が叫ん

だ——

「さまあみろってんだ。ねえ、レイターの奥さん。奴はまだ何も分かつちやねえんだ。奴も赤ん坊ができりや、聖靈降臨祭（二六）に家に置いとくなんて、俺みてえに気が進まんじゃろうに。もう少しばかり長生きしてみなよ。そうすりや、奴がダナム公園で両腕に双子を抱え、もう一組の双子が奴の上着の裾をつかんどる、そんな姿を見るつてことになるぞ、きっと。奥さん、お前さんの分の子供たちも忘れちやいかんがね」

この瞬間、我らが友のリビーが窓辺に姿を見せたので、泡を食つた旦那に取つて代わつていたレイターの奥さんが、大きな声で叫んだ——

「エリザベス・マーシュ、お前さん、ディクソンさんたちと一緒に、どこへ行くんかね？」

「ディクソンさんたちはまだ起きてません。御主人が昨晩おつしやつてましたが、祭日はベッドで寝て過ごすんだそうです。あたしは古くせえ場所のダナムへ行きますよ」

「暗い顔して、まさか独りで行くんじゃないだろうね！」

「いいえ。マーガレット・ホールさんと息子さんが一緒にですよ」と、リビーは答えると、あわてて窓から引っ込んだ。それは彼女が行楽の日のために選んだ仲間——近所のガミガミ女と長患いで虚弱な息子——について何やかやと言われるのを避けるためで

あつた。

しかし、ジュピターがもたらした平和と幸福を考えると、少なくとも三人の人間にとつて、この鳥はハトに、鳥籠に巻きついたツタの葉っぱはオリーヴの小枝（二七）に思えたかもしれない。といふのは、もちろん、誰がフランク・ホール君に聖ヴァレンタインの贈り物をしたのかについては、いつまでも謎のままにしておけなかつたし、息子に新しい喜びを与えてくれた人に対して、母親がいつまでも厳しい態度をとり続けることはできなかつたからである。ホール夫人は用心深かつたし、プライドも高かつたので、感謝の念を表したいという自然な気持ちとしばらく鬪つていた。だが、ある夕方のこと、リビーが自分の体の半分もあるうかと思える針仕事の荷物を背負つて家路に就き、熱くなつた道路に沿つて足を引きずりながら歩いていると、マーガレット・ホールに追いつかれ、背後から荷物をそつと引き上げられたので、家路が短くなつたような気がした。また、マーガレットが感謝の気持ちを心の底から表したので、彼女の疲れはてた心も慰められて明るくなつた。なぜなら、打ち解けなさという障壁がひとたび崩壊すると、のべつ幕なしにマーガレットがしゃべり始めたからである。彼女は息子に楽しくて嬉しい仕事を毎日のように与えてくれたりビーに感謝したがつたし、息子の感謝の念も伝えたがつたし、自分が抱いている希望と不安——彼女の日常生活を構成して

いる様々な希望と不安——について語りたかったのだ。その時からリビーは、脆弱な小型の帆船^{バルク}(一八)のような我が子に自分の全部をあえて積載した母親に対する関心のあまり、このガミガミ女の恐怖を感じなくなってしまった。リビーは母親と息子にとつて心腹の友となり、悲しい日々を送る少年をなだめるための計画をいろいろと立てるようになった。そして、その熱意は哀れなマーガレット・ホールの熱意と同じくらいだったにもかかわらず、より大きな成功を収めた。リビーのおかげで、魅力と興奮に満ちた最後の数ヶ月間、フランク・ホールの命の灯火は少しだけ明るくなつたのである。彼は、ダナムの日帰り旅行に行つてもいいよと言えるほど、体力を回復したようにさえ見えた。それは、リビーが聖靈降臨祭のサプライズとして準備し、彼の母親と一緒に数週間にわたつて金を貯めていた旅行である。

朝の六時にノット・ミル(一九)を出る運河船があつた。今ちょうど五時を過ぎたところだ。リビーはそつと静かに外へ出て、向かいの親友たちのところへ行つた。彼らの下宿の扉をノックして、応答を待たずに家中へ入つた。

フランキーは顔を紅潮させて興奮で震えていた——一つには喜びのあまり、一つにはまだ許されていない何か切なる願いのためであった。

「あの子はピーターと一緒に連れて行きたくて仕方ないみたい

だよ」と、母親はリビーに言つた。それは「この問題はあんたに任せると」といった口調だつた。少年は懇願するようリビーの方を見ていた。

「ピーターもそうしたいんだよ。一つには、ぼくがいないと、ひどく寂しくなつて、一日中ピーピー鳴いちやうからね。きっと心細いんだ。あいつがここに独り残されるなんて、考えただけでも楽しくなくなつちやうよ。それからね、リビー、いかにもキリスト教徒らしく、花とか緑の葉っぱとか、そんな類のものが大好きなんだ、あいつは。母さんが鳥籠に巻きつけるのに一ペニー分のニオイアラセイトウ(二〇)を買つてくれた時なんか、それはもうチユツチユチユツチユつて鳴いてたんだよ。あいつは人間みたいに話がしたいんだ。でもね、あいつが言おうとしてることは、ホントにしゃべつてゐみたいに、ぼくにはよく分かるんだよ。ピーターも行かせて、リビー、お願ひ。ぼくが自分の腕で抱えて行くからさ」

ということで、ピーターも一行に加わることが許された。ところで、フランキーを船まで運ぶという大きな難問を克服するために、リビーは「自腹を切つて」(二一)馬車を雇うこと申し込み出ていた。隣人たちの呼ぶ声や叫ぶ声が聞こえたので、自分たちを運ぶ馬車が路地の奥に用意されていることが彼女たちにも分かつた。身体障害の程度は重いものの、体重は軽いフランキーを

抱えて運んだのは母親であった。彼の方は自分が鳥籠を持つと言つてきかず、そうすることによってピーターのことで誰の迷惑もかけないという約束を果たしていると思つていたようだ。さらに続けて、リビーは弁当の入った包みを馬車の片隅に置き、それが彼の体の支えになるようにしてやつた。隣人たちは木で鼻をくくつたような言葉をいろいろとかけたが、幸福を祈る優しい言葉もそれ以上にかけていた。彼らの中には、マーガレットが重そくに抱かえた息子を代わりに運んでやろうと申し出る者も一人、二人いた。しかしながら、彼女はそれを許そうとしなかつた。この母親と隣人たちの間に存在し、何日も何日も小さな路地の緊張関係^{ボリティクス}を生み出していた怒りの感情は、身体に障害のある少年がいることによつて、すべて忘れ去られてしまつたようである。

さて、みんな順調に出発した。フランキーは馬車の揺れで体に走る痛みを我慢しようとしたが、それもやはり無理なようで、じつと唇をかみしめていた。彼が激痛でひるんだり縮み上がるがつたりしているうちに、マカダム工法で舗装された（二三）公道にやつと出ることができた。彼は目を閉じていたが、数分ほど休憩したがつているようだつた。リビーの方は急に引っ込みがちになつた。どうやら、彼女は「偉そうに馬車なんぞに乗つて！」と言わるので非常に恐れていたようで、片隅に身を隠してできるだけ小さくなつていた。それとは対照的に、ホール夫人はまつたく反

対の感情を抱いていた。馬車の中で嬉しそうに立ち上がり、窓から手を伸ばしたり、歩道を行く人たちに出会つたり追い抜いたりする時は、ほとんど全員に会釈していた。そうした人たちの数は相当なものである。天気のよい休暇となつた今週は、こんな早朝でさえ、あちこちの鉄道駅に向かう一行や、運河を埋めつくしている船へ向かう一行で、道路は実にぎやかだつた。途中で出会つた人々はほとんど全員、ホール夫人の浮き浮きした気持ちに共鳴しているように見え、微笑や会釈を投げ返していた。やつと会つた人々はリビーのそばにドシンと座り、「馬車なんか、今までに一回しか乗つたことないんじやよ。それはねえ、結婚式に行く時じやつた」と声を大にして言つた。そして、馬車の内装に感心しながら、「まるで天国みてえじや。しかも、こんな美しい^{ヤンブ}籠縁^{（二三）}で、すっかり改装されて！」と続けて言つた。

休暇、素晴らしい天気、「甘美な早朝」（二十四）が人を元気にする力を持つてゐるかのように（間違ひなく持つてゐるのだが）、それらの影響下で全員の心が可哀想なフランキーに対して和らいでいるようだつた。馬車の御者は力強い腕で優しく彼を抱き上げ、慎重に下の船のところまで運んでくれた。すると、船に乗つていた人たちが場所を空けて、彼に一番よい席を与えてくれた。いや、それは一番よい席というよりは、寝椅子と呼んだ方がよい。というのも、みんなは彼が疲れていると分かるや、横になる

べきだと言ひ張つたからである。とはいへ、そんな姿勢になることは、幾つかの籠と一緒にピーターを運びながら、やつと現れた母親とリビーの世話にならなければ、彼には恥ずかしくてできなかつたであらう。

船が岸を離れると、そのあとへ他の船がたくさん入つてきた。なぜなら、聖靈降臨祭の週には、田舎の魅力を楽しむ機会を疲弊した大衆に与えるためであろうか、陸路と水路の両方の乗り物の需要がとても高まるからである。運河を走る小さな定期船は立ち席でさえ全部いっぱいだ。定期船がスーと進んで行くと、運河の土手に人垣ができる。彼らは、船がそばを通るとき、それを見ることだけを目的としているのである。船には、今日の行楽のこと期待に満ちた顔をした幸せそうな人々が、立錐の余地もなく詰め込まれていた。船が通り抜けて行く田舎が非常に退屈であることは想像にかたくないが、それでも田舎は田舎。子供たちの楽しそうな金切り声、親たちの嬉しそうな低い声（どこかの田舎屋の壁に花や葉っぱをなびかせる満開の木とか、運河の土手に沿つて涼しげな草の深みで咲いている春の名残りのサクラソウの茂みとかを見ての笑い声）、この楽しい一日を十分に味わうことなく終わらせるなんて考えただけでもゾツとするかのように、あらゆるものをお完全に楽しんでいる声——これらの声を聞いていると、マンチエスターから八マイルしか離れていない場所まで到着す

るのに一時間も要したにもかかわらず、その二時間が途徹もなく短いように思えた。フランキーでさえ、（両方とも金で舗装されている（二五）と思つて、どうやらロンドンと混同していたらしい）ダナムの森を見たくてたまらないようであった。いろんな景色が目の前を流れて行つたが、彼は船が軽やかに進む時のゆつたりした揺れをとても楽しんでいた。そのためか、柔らかな緑の牧草地——運河の波が揺れながら打ち寄せる岸まで傾斜していた牧草地——に下船する時になると、實に残念そうな様子だった。仲間の乗客たちは彼を公園まで運んでもくれた。この奉仕に対する報酬として、彼の母親はわざわざ六ペニスを取つておいたのだが、お金の受け取りは拒否されてしまった。

「ああ、リビー、なんて美しいんだ！　ああ、母さん、母さん！　マンチエスターの外の世界つて、こんなに美しかったの？　樹木がこんなだとは思わなかつたよ、ぼく！　鳥たちにとって、なんて青々とした家なんだろう！　見てごらん、ピーター！　あの上の大枝のところへ飛んで行きたくないかい？　でも、行かせないよ。だって、お前はぼくの友だちなんだから。お前がいなくなると、まつたく困つちゃうよ」

みんなはブナの木の根もとの苔むした綺麗な芝土の上にショールを広げた。それは自然から作った寝椅子のように見えた。嬉しさのあまり彼はどんな激しい運動でもできると思つていたようだ

が、みんなは彼をそこに寝かせ、休息しなさいと言った。彼が横になつた——いつもジュピターの鳥籠を抱きかかえ、まるで遊び仲間であるかのように、たびたび話しかけていた——場所は、堂々とした樹木に囲まれた緑地帯の端っこにあつた。そこは、新緑が夏の熱気で濃くなつて深みのある単調な同一色になる前だったので、まだ初々しい葉っぱの美観を呈していた。この場所へ行楽の一行が陸続とやつて来ていた。若い男、若い女、年老いた者、幼い者（二六）——家族全員が先頭の父親たちのあとから列をなして歩いている。父親は幼子を腕に抱いたり、背中におんぶしてしたが、この土地については妻と何か他愛もない思い出を共有しているようで、時おり後ろを振り返っていた。ダナム公園は何年にもわたつて、マンチエスターの労働者たちにとって、お気に入りの行楽地であつたのだ。何年か分からぬほど昔からそうであつた。おそらく例の公爵（二七）が自分の運河を使って安い旅のシステムを確立して以来ずっとであろう。マンチエスターの（あわ）だしさや喧騒と完全に対照をなし、太古からの（どころどころ雷に打たれて白くなつて）いる樹木で申し分のない森林地となつてゐる公園の景色。公園の「緑の草木でできた壁」（二八）どこか遠く離れた林間の空き地に通じている公園の草深い散歩道——前年に生えたシダ類の間でカサカサと音を立てるウサギにハツとしたり、モリバトの鳴き声が公園と調和した唯一ふさわしい音に思え

るような散歩道。確かに、この完璧な森林地の深閑さ、この手軽に経験できる静寂、（田舎の象徴である緑樹の形で人間の魂を包みこんでいる）これこそが都会ともつとも完全なコントラストをなし、結果的に都会の人間を魅了する最大の力を持つことになるのだ。

ほどなくリビーはひどい空腹を覚えた。とはいゝ、彼らは弁当しか用意していなかつた。もちろん、それはできるだけ十二時近くになつて食べなければならない。それで、マーガレット・ホールは気転をきかせ、近くにいた労働者に、いま何時か教えてくれるよう頼んだ。

「いやいや」と男は答えた。「今日は時計なんぞ見やしねえ。時の経つのがいやに速いぢやねえかと思つて、楽しみをぶちこわしたかねえからな。お前さん、腹が減つてんなら、さつさと食べてしまいな。自分の弁当を食べる時間ぐれえ、自分で決めらあ。もつとも、俺の分は一時間も前に食つちまつたけどよ」

ということで、彼らは仔牛の肉パイを食べてから、まだ十時半を少し過ぎたぐらいでることに気づいた。その日の午前中はそれほど楽しい催し物が多かつたのである。しかし、彼らはいつも思い悩んだりしない性格だったので、むしろ自分たちの間違いを面白がつて、九時頃に弁当を食べてしまつた男のことを一緒に笑つっていた。実は、笑われた男が一番うんと笑つていた

のだが、突如として笑うのをやめて、こう言つた——

「おつと、こんな調子で笑い続けてちやいけねえ。笑うとまた

腹が減つちまうからな」

「ああ！ そんだけのことなら」と、ある陽気な顔をした男が言つた。この男は全身を伸ばして寝そべり、草をサッとなでて新鮮な香りをかいでいた。そのそばでは、さながら親にじやれつく子犬や子猫のように、幼い子供たちが転げまわつたり、這いまわつたりしている。「そんだけのことなら、弁当を朝飯の代わりに食つちまつた、そんな後先かまわん連中のために、ここは一つ、食べ物を寄付してやろうじゃねえか。ここに俺の分としてソーセージの練り物と木の実が一握りあるぞ。おい、ボブ、帽子を持つてぐるぐる回つてやりな。仲間の連中が何を出すか、見てみようじやねえか」

この冗談をボブが実行に移したので、フランキー君はとても面白がつていて。集まつたのはペパーミント・ドロップから仔牛の肉パイやソーセージの練り物まで多種にわたつたが、寄付を拒むようなみみづちい男は一人としていなかつた。

「商売大繁盛だ！」とボブは言いながら、帽子いっぱいの食べ物をリビーのそばの草の上にぶちまけた。「しかも、みんなのスネをかじるつてのは、最高の気分じやね。シツ！ 何じやね、ありや？」

おしゃべりと笑い声が突然ストップし、母親たちが子供たちに耳を澄ませてごらんと言つた。遠く離れたところで、時には低くて小さく、時にははつきりと強く、響き渡るような子供たちの声が、私たちすべてが慣れ親しんだ讃美歌の旋律と混ざり合つて聞こえてきた。それは、私たちが何でも不思議がる子供だつた頃に、完全無欠な崇拜の対象である神のもとへ召されてしまつた最愛の人たちによつて、「我らが父」を崇拜するために初めて教会へ連れられて行つた、遠い、遠い昔を思い出させるような讃美歌の旋律であつた。遠くで聞こえる合唱の讃美歌は、もつとも思慮を欠いた人間にとつてさえ、神聖なものに思えた。実際に、その讃美歌が終わると、また旋律が聞こえるのではないかと、しばらくなみみづちの耳をそばだてていた。その間ずっと、素晴らしい天氣の日に死ぬほど踊りまくる無数の昆虫たちの、真昼にブンブンと飛びまわる音が聞こえていた。心地よいが抵抗できない微風を受けて巨大な森が揺れる音も聞こえた。それから、子供たちの樂しそうな冗談や叫び声がまた急に沸き起つて、年長者たちは「緑樹の木陰に」(二九) 横になつたり座つたりしながら、楽しい話を再開した。新たに行楽の一一行が次々と立ち寄つて行つたが、野花——實際にはほとんどサンザンの枝——をたくさん抱えたグループもいれば、咲き始めのヨーロッパノイバラ(三〇)を摘み取つて、この垣根の麗人がナデシコやハコベやセンノウの中に潜んだり隠

れたりしないように、そうした同類の植物を捨てて行くグループもいた。

このような一行がフランキーの近くにやつて来て、もらつた花を横になつて仕分けしている彼の姿を興味深そうに眺めていた。健康と美に恵まれた幸せそうな親たちは、うるさい音楽隊のような子供たちに囲まれて、フランキーのそばに立つていたが、しなびた手足、やせ細った指、そして鮮やかだが暗い輝きを放つランプのような目が悲しくも予言していることを感じ取っていた。彼の母親は嬉しそうな我が子の姿を熱心に見つめるあまり、傍観者たちの深刻な表情の意味を読み取れなかつたが、リビーははつきりと読み取つていた。こんな日でさえ、彼の将来のことを考えると、彼女の体には悪寒が走つた。

「やつぱりねえ！ きっと腰を抜かすだろうつて思つてたよ！」

何気なく座つて花を仕分けし、ずっと悲しい物思いに耽つていたリビーは、背中をひどくピシヤリと叩かれて、実際に腰を抜かしてしまつた。それはディクソン夫妻だつた。彼らとその子供たちは、ベッドで寝ながら祭日を祝うことなどはせず、起床して、この近場に乗合馬車でやつて来たのだつた。マーガレット・ホールとディクソン夫人との仲違いのために、一瞬、この出会いはバツの悪いものになつたけれど、こんな祭日に、しかもこんなに静かな美しい場所で、優しい母なる自然の慰めを長く拒み続けるこ

となどはできなかつた。そんな慰めを無視できる人がいたとして、フランキーの姿を見れば、たちまち畏敬の念に襲われて、腹立たしい気持ちも穏やかなものになつたであらう。ディクソン夫婦が最後に会つてから、彼の姿はそれほど変わつてしまつてはゐない。かつてのフランキーは近所で妖精パックとかロビン・グッドフェローとか(三二)呼ばれていた。彼のビー玉はいつも大人の足もとに転がつてきたし、独樂の紐は不注意な人間をひつかけようと輪つかの形でいつも吊り下げられていた。そうだ、今では弱々しく、穏和で、ほとんど女の子のように見える少年が、幸せで快活な腕白小僧だつた頃もかつてはあつたのである。そんな腕白小僧として、ディクソン夫人——今まさに目に涙を浮かべて、彼を見つめているディクソン夫人——に、しばしばビンタを喰らつていたのだ。そのような彼女が、衰弱して変わりはてた彼の姿を見て、その母親と喧嘩を続けることなどできるだらうか？ 「どの位ここにはいるんかね？」とディクソンが尋ねた。

「ほんと一日中です」とリビーは答えた。

「シカとか超キンダ・アンド・ライジングド級のカシの木とか、見に行かんかつたんかね？ うわあ、馬鹿だな——」

妻が彼の腕をつねつて、どうすることもできないフランキーの体の状態を思い出させた。もちろん、そんな状態でなければ、行きたくて仕方ない彼の足をつなぎ止めることなどはできなかつた

だろう。とはいへ、デイクソンには窮余の策があつた。彼はボブルの他に男を二、三人ほど呼んで、それぞれに格子縞の強いショールの角を持たせ、まるでハンモックに乗せたみたいに、みんなでフランキーを吊り下げさせた。こうして、彼を森の小道に沿つて運び、なめらかで草の多い芝生を越えて行くと、上を向いた彼の顔に光と影がちらちらと射した。その後ろから、女たちはおしゃべりをしたり、道草を食つたりしながら、ハンモックを見失わないよう歩いていた。時には地面から何か緑の宝物を摘んだり、時にはウマグリの低くたれた枝に手を伸ばしたりした。この祭日に、この森で、まったく知らず知らずのうちに、みんなの心は大きくなつていていた。人間の心とは実際にそんなものである。みんな、フランキーのハンモックを運ぶ男たちのあとに続いて、草の深い塚を登つた。頂上には松林があつて、その幹は太陽光線を受けて紅に染まつた黄金のように見えた。彼らはフランキーをそこに連れてきて、遠く離れた青い平原に横たわるマンチエスターと、それを背景にして前景の森林地が穏やかな、くつきりした線で横切る景色とを見せてやつた。この平たい草原の遠く、遠く離れたところでは、大都市の上にたれこめて微動だにしない、雲のような煙が見えるかもしれない。それがマンチエスター——醜くて、すすぐたマンチエスター——である。子供たちはそこで勤しむ親愛なるマンチエスター——である。子供たちはそこで

生まれ、おそらく何人かはそこで死んで埋葬されている。彼らの家はそこにあるたし、彼らの人生はそこに運命づけられ、彼らはそこで働いて運命を全うするよう命じられているのだ。

「ヤツホー！ 焼き串まわしさん(スモーク・シャック)」とボブは叫んでから、フランキーを草の上にそつと下ろし、大声をあげる前に帽子をぐるぐると回した。全員から「ヤツホー、ヤツホー」の叫び声。「おいらの帽子の縁が、輪投げの輪(スモーク)つかみてえに、あんな場所まで飛んでつてらあ！」ボブは静かにそう言いながら、裁判官のような真面目くさった顔をして、縁のない帽子をまた自分の頭にかぶせた。

「日曜学校(三四)」の子供たちが、丸パンとミルクの弁当を食べに、こっちの木陰にやつて来たぞ。シッ！ どうやら幼稚学校(三五)の食前の祈りをやつとるみてえだ

子供たちはすぐ近くに座つたので、彼らの食前の祈りの歌詞がフランキーにも聞こえた。子供たちは、今週の休暇のために派手な夏のプリント地の新しい服を着せてもらい、この緑の丘の斜面で車座になつていたので、幸せそうな明るい小顔で作られた花飾りの輪のよう見えた。「ちび」と呼ばれていた小さな女の子が一人、ずっとフランキーを見て、恥ずかしそうに彼の背後にやつて来て、自分の半割の丸パンをそばに投げてから走り去つた。そして、そんな優しい衝動に駆られた自分自身の大胆さ

がとても恥ずかしかつたのだろうか、姿を隠してしまった。隠れた場所から、この女の子はずつとフランキーをちらちらと見ていたが、見られている彼の方は喜びと幸せに圧倒され、ほとんど食べ物に手がつけられなかつた。それほど世界は美しく、それほど男も女も大人も子供も優しくて親切だったのである。実際、みんな、大地の美しさに心を和らげられ、麗しき大地の創造主である愛の化身に知らず知らず感動させられていたのだ。

しかしながら、一日も終わりに近づいた。暑気は和らぎ、鳥たちは再びさえずり始めた。それに呼応して、万物に生氣を回復させる露が降り始めたことを示す馥郁^{ふくいく}たる新鮮な香りが、樹木や草木のあたりに漂つている。そして——とうとう、帰りの船の時刻が近づいてきた。牧草地の小道をてくてく歩いて戻つてみると、昼の間に出会つた多くのグループと合流した。みんな幸せいつぱいで、今日一日の経験談で持ちきりである。積年の恨みは忘れ去られ、新しい友情が育まれていた。今日一日の間に新たな趣味や高尚な娯楽が彼らに与えられたからであろう。私たちはみんな、何らかの崇高な考え方や情け深い思い（この世でもっとも気高いもの）によつて、天国に行つた時の私たちの顔と似たような表情をよく呼び起される。多くの人たちの顔に、そうした表情のきらめきを——「私たちの家となる」（三六）天国から射して雲のように浮かんで見える神の栄光のきらめきを——見て取ることができ

る。そんな表情が、ダナムの森を——急速に夜の闇へ溶けこんでいるが、安らぎと美しさのイメージを伴つて、いつまでも生々しく新鮮な思い出として多くの織機、仕事場、工場に残り続けるであろうダナムの森を——名残り惜しそうに振り返つて見ている大勢の人たちの仕事で疲れたシワだらけの顔に浮かんでいた。

その晩、リビーが眠れぬまま横になつて、昼間にあつた出来事を思いめぐらしていると、開け放たれた窓を通してフランキーの声が聞こえてきた。彼は、痛みから生じる例のうめき声をあげることもなく、子供たちが合唱していた讃美歌の折り返し句を思い出そうとしていた——

この世で我らは悲しみと苦しみを受ける

この世で我らは再び別れるために出会う（三七）

天国では我らが別れることは決してない
ああ！ それは嬉しいことなり……

リビーはその日もつとも幸福だった時に自分にささやかれた彼の質問を思い起した。「ダナムは天国と似てるかな？ ここの人たちは天使みたいに親切だね。だったら、天国がここ以上に美しい場所である必要はないよ。君と母さんさえ一緒なら、ぼくは死んでしまつて、ずっとそこに住みたいなあ！」と、彼はリビーに

言つたのである。彼女はフランキーが不敬なことを言つていると
思い、その発言をさえぎつた。しかし、天国が——彼は自分が急
ぎ足でそこへ向かっていることを自らの英知によつて悟つていた
——どういう場所なのか、ある一定のことを知りたいという少年
の願望に、間違つたところは、いや、悲しいところさえ全然な
かつた。なぜならば――

天国では我らが別れることは決してない

のだから。

第三の祭日 ミカエル祭

教会の時計が三時を報じ、早めの昼食を済ませて仕事に戻る紳士たちの群れも、事務所や大商店の中に消えてしまつてゐた。人通りがなくなつた街路は水を打つたように静かで、御婦人たちが午後の買い物や訪問にさつそつと出かけようとしていた。

小さな葬列がゆつくりと、ゆつくりと街路に沿つて、曲がり角に来るたびに人間どもから肘で押しのけられながら、くねくねと進んでゐる。四人の男たちが子供の棺桶を運び、そのあとから二人の女が頭をたれて、おとなしく歩いてゐる。

それが誰の棺桶なのか、その二人の会葬者が誰なのか、ここで述べる必要はあるまい。フランク・ホール君については、すべてが今や終わつてしまつた。彼のたわむれ、おどけ、病氣、苦しみ、そして死。復活と生命^(三八)を除いて、すべてが今や終わつたのである。彼の母親は茫然自失の体^(三九)で歩いている。彼が死んだなどということがあるだろうか！ 彼女の思考の対象が彼でなかつたなら、彼女の重労働の動機が彼のためでなかつたなら、もつと早く彼の死を理解できただろう。しかし、実際そうではなかつたので、彼女はまるで何か重苦しい悪夢に駆られているかのように、可哀想に見放された息子のやせさらばえた亡骸^(なきがら)について行つた。息子が本当に死んだのなら、どうしてまだ生き続けることなどできようか？

マーガレット・ホールに比べれば、リビーの頭はそれほど呆然としていたわけではない。どちらかと言えば、かなり活発に働いていた。いろんな光景が、さながら魔術幻灯^(ファンタスマゴリア)^(三九)のように、リビーの目の前を素早く通りすぎて行つた。その光景というのは次のような記憶からなるものである。今ではかなり昔のことにも思えるが、弱々しく振られる腕の影が最初に彼女の注意を引いた時の記憶。世界が喜びと美と生命に溢れて見えるダナム公園で過ごした快晴の特別な祭日についての記憶。午後の熱い太陽光線から逃れることのできない小さな風通しの悪い部屋で、可哀想にフラン

キーがハーハーと息をしながら体力を失っていた長い暑中期間にについての記憶。寝ても覚めても常にうめき声をあげている彼のそばで、母親とリビーが寝ずに看護をしていた長い夜についての記憶。苦痛から生じる苛立ち——彼自身の目から見た場合の苛立ちにすぎず、他人から見ると正真正銘の神々しい忍耐強さ——に対する彼の憐れむべき自責の念についての記憶。それから、生命力が衰え、体力が消失し、ますます意識が遠ざかり、顔に暗い影が射したのに続いて、天使のように安らかな美しい表情が浮かんだ——彼はどこに行つたのか——今はどうなつてしまつたのだろうか？

そして、彼が墓に埋葬されると、厳かな弔いの言葉（とむら）が聞こえた。その言葉は、会葬者たちに向けられたものではないかのようにはるか遠く離れた場所で聞こえていた。

マーガレット・ホールは最後の一瞥のために墓の上に身をかがめた。彼女は朝からずっと口を開くことも涙にむせぶこともなく、時々ぶるぶる震えるだけであった。しかしながら、今や彼女の体はリジーの腕に重くのしかかるようになつた。そして、ため息や声をあげることなく気を失い、積み上げられた砂利の上にドサッと倒れた。みんなはリビーと一緒になつて彼女の意識を回復させた。目が半分ほど開いて息づかいが変つたことで、彼女の意識が戻つたことは分かつたが、その後ずっと彼女は慣れない砂利

のベッドから起き上がるもせず、横になつたまま口をつぐんで微動だにしなかつた。そんな些細な努力をする価値さえ、この世には全然ないと思っているかのようだつた。

やつとのことでリビーと彼女は、この聖なる神々しい場所を離れ、さらにもつと神聖な唯一の場所へ向かつた。それはフランスキーが息を引き取つた場所、目に入る安物の粗末な家具の一つ一つに彼の思い出が宿つている場所である。ドアを開くと、下宿の雑役婦がリビーを脇へ引っ張つて行つた。

「向かいのアン・ディクソンが会いに来なすつたよ。ひと言あんたに話があるそうじゃ」

「今は行けません」とリビーは言いながら、息子を失つた母親と一緒に部屋（「あの子の」部屋）に入るべく、急いで押しのけて行つた。リビーが予期していたように、この誰もいない部屋を——とても長い間すべてが陰気で沈んだ感じになつていて部屋を見たことで、そして新鮮な空気と人を喜ばせる明るい日光を入れるために開けられてカーテンが引かれた窓をチラッと見たこととで、哀れな母親の涙をたたえた泉の堰（せき）が切れてしまい、彼女は息子を求めて長く、かん高い叫び声を発した。

「ああ！ ホールさん！」と、リビーは自分自身も涙でしどど濡れながら言つた。「そんなに悲嘆に暮れないでください。もしあの子が生きてたら、とっても悲しみますよ、きっと。それ

に、あの子は実際に生きてますよ——聖書にはそう書かれていますから。おそらく、あたしたちがあの子なしでどんなふうにやつてるかを見守り、あんまり気をもまないようについて願つてることでしょう」

ホール夫人はますますひどく涙にむせび、ヒステリ一状態になつた。

「ああ！ 聞いてください！」と、リビーはもう一度、いやが上にも高まる自分の心の動揺と鬨いながら言つた。「聞いてください！」ピーターが、困つた時にいつもするように、なんだか怖がつてチユツ、チユツ、チユツと鳴いてますよ。あのカナリヤが、あんなかん高い声で、チユツ、チユツ、チユツと鳴くなんて。死んだ彼が耳にしたら、決して我慢できませんよ」

マーガレット・ホールはなんとか自制し、息子が愛した小さな鳥を怖がらせないよう、苦悶の表情を必死に抑えていた。この母親の悲しみが少なくとも表面的に静まると、リビーは汲めど尽きせぬ慰めの泉として「ヨハネの福音書」第一四章(四〇)で開いた状態になつて古い大きな聖書を手にとつた。

こうした大きな家庭用の聖書が、この章で実際に幾たび開かれてきたことか！ まるで、聖書は喜びや繁栄に満ちている時には見向きもされないが、人間の魂は、疲労や悲嘆で苦しんでいる時には、ちょうど幼子が悲しみや心配のある時に母親の優しい慰め

を求めるように、この章に書いてある愛情や同情の言葉を求めて舞い戻つてくるかのようである。

マーガレット・ホールは涙で濡れた憂い顔から搔きあげ、自分の息子が住まい熱っぽい、涙で汚れた憂い顔から搔きあげ、自分の息子が住まいに行つた「父なる神の家」(四二)についての考えを少しまとめようとし、とても真剣な目つきで耳を傾けていた。

ここで、扉をノックする低い音にささえられたので、リビーが応対した。

「アン・ディクソンはあんたが帰宅したのに気づいたそうじゃ。話をしたがつとるよ」と、下宿の雑役婦がささやき声で言つた。リビーはまた戻つて聖書を閉じ、マーガレット・ホールに少し説明してから、一階に駆け下りた。すると、アンが自分に会いたがつている理由が分かつた。

「ああ、リビー！」と彼女は絶叫したが、すぐにリビーの最後の厳肅な務めを思い出して、ぐつと感情を抑えた。「マーガレット・ホールはどう？ もちろん、可哀想なんだけど、やっぱり最初はちょっとやきもきするわよね。いずれ元気になるさつて、母さんは言つとるわ。あの哀れな少年が召されたのは悪いことじゃないんだから。だって、いつも半身不随で、あの人の足手まといだつたんですもの——昔は元気な少年だったのにね」

アンは別の問題で頭がいっぱいだつたが、リビーの悲しそうな

泣き顔と物静かな沈んだ態度を見て、この話し相手の心を完全に奪っているテーマとは別のテーマで話を始めると、これは気まずいことになるなと思った。リビーは彼女の最後の発言に対してもう一度悲しげに答えた――

「間違いなく、アン、これは最善を考えての天の配剤なんです。でもね、ああ！ 確かに半身不随だつたけど、母親の足手まとい

だつたなんて言わないで。そんなふうになるなんて考えないでちょうどだい。彼のために何かしなくちゃならないことがあれば、それだけいつそう彼のことを愛しておられたんですから――あたしだつてホントにそうだつたのよ」

リビーは前掛けで顔を隠して少し泣いていた。アン・ディイクソンは意見が一致しない話題を持ち出して、さらにいつそう気まずい思いをした。

「そうね。『人は草なり』^(四三)って、聖書にはそう書いてあるわね」と彼女は言った。この世にある万物のはかない性質について教訓的な話をするつもりはなかつたにせよ、できることなら聖句を引用することで礼儀を果たそうとしていた彼女は、これで自分の本来の用向きに話題を移してもよからうと思つた。

「リビー・マーシュ、あんたまでずっと落ち込んでぢや駄目よ。今日の午後、あんたに会いにきたのはね、明日は結婚式に来てくれなくちやつて、言いたかつたからなの。ナニー・ドーソンが病

気になつたんで、是が非でもあんたには彼女の代わりに花嫁の付き添い役をやってもらいたいのよ」

「明日ですって！ ああ、駄目よ――絶対に駄目！」

「どうして駄目なの？」

リビーが返事をしなかつたので、アン・ディイクソンはいろいろ不随のために、あたら一日の楽しみを逃すつもりじやないわよね！」

「ええ――それは逃すべきもんじやないわね――お願ひだから彼のことで腹を立てないで、アン・ディイクソン。あたしには楽し

みになるなんて思えないの――楽しめるような気がしないのよ。でもね、ありがとう。あたし、あの子のことがそれはもう大好きだつたの――ホントに」と、彼女は涙にむせびながら言つた。「彼のことを忘れて、そんなにすぐ楽しくなれないのよ」

「まあ――驚いた！」アンは瘤瘡玉かんしゃくが破裂したような口調で叫んだ。

「ホントに、アン、あなたは親切よ。あなたとボブが幸せになりますように――そうなるわよ、きっと。でもね、たとえ結婚式に行つたとしても、あたし、一日中ずっと彼と可哀想な彼の母さんのことを考えるでしょう。結婚式の時に死んだ人のことばつか

り考えるのって、縁起が悪いって言うしね」

「馬鹿らしい！」とアンは答えた。「あたし、縁起が悪いことなんか、痛くも痒くもないわ。結局のところ、結婚するつてどういうことなの？ 単なる空騒ぎだつて、ボブは言つとるわ。あたしはいい奥さんになれんだろうつてのが彼の口癖よ。だつて、工場で働いてばかりいたんだから、あたし、家事のことなんかチンパンカンパンだもの。でもね、他の誰かさんと気楽にやるよりか、あたしと一緒に落ち着かない方が、彼にとつてはいいんだつて。愛なんてそんなもんよ！ あたしだつて、他の誰かさんとしらふでいるよりか、彼をへべれけにしておいた方がいいわ」

「まあ！ アン・ディイクソン、口を慎んで！ 酒飲みの夫を持つつてのがどんなことなのか、あなたにはまだ分からぬのよ。

あたしには経験が多少あるの。父さんはよくぐでんぐでんに酔つてたし、結局それが原因で、放つたらかしにされた母さんは死んじやつたの。ああ！ アン、酔っ払いの男と結婚した妻が、どんな忍耐を強いられるか、神様にしか分からぬのよ。人には言わないでね——」と、リビーは声を低くして言つた。「あのね、いつものように飲んで暴れてる最中に、父さんは赤ちゃんと殺してしまつたの。それからというもの、母さんは二度と再び顔を上げなかつたわ。そのことでは父さんも同じなんだけど、ただ、父さんの場合は母さんとは違つてたの。(四三)今はもう母さんもジエ

ミーちゃんのところに行つて、二人とも一緒に幸せに暮らしてるこことでしょう——それから、たぶんフランキーもね。ああ！」と、彼女は何を考えていたのか思い出して言つた。「だから、夫が酒びたりになつて妻の運命について、そんな軽々しいことは絶対に言わないのでちょうだい！」

「まあ、なんてお説教なの！ あのね、リビー、あんたつて人は今まで見たこともない、生まれながらのオールドミスだわ。しかも、ふだろうが、へべれけだらうが、あんたと結婚してくれる男なんかいいるもんですか！」

リビーは顔をかなり赤くしたが、温和な表情を失うことはなかつた。

「そんなことは言われなくとも分かつてるわ。神様は、女に与えられた当然の仕事を、あたしにさせないことが適當だと思われたんだから、あたしはなおさら自分で仕事を見つけるように努力しなきりやいけないの。つまりね」と言つてから、リビーはアン・ディイクソンの当惑した顔を見た。「自分自身の家庭、すべてをきちんとするように妻に期待するような夫、看護や世話をしなきやいけない子供たち、女に与えられた当然の仕事だと思つてるもの、そんなものはすべて持てそうにならないんだから、結婚のことでいらっしゃったり、そわそわして時間を浪費するんじゃなくつて、自分のまわりには何か他にすべき仕事がないかしらと思つ

て、探さなきやいけないの。このような仕事の機会を逃してゐる人はたくさんいるわ。こうした仕事に臆せず立ち向かい、本気で

オールドミスになろうとする、そんな人はいないわよね。つまり、オールドミスのような人ができるように、神様は余つた仕事オッド・ジョブをこの世にちゃんと残しておいてくださつてゐるのに、みんな、オールドミスのままで、そんな仕事を求めたりしないんです。そんなことはせずに、決して自分自身のものになりそうにないことに憧れてゐるのよ。余つた仕事はたくさんあつて、それをする人たちには神様の祝福があるんですけどね」

このように、彼女は長い間ずっと心の中で考えていたことを吐露したので、もう少しで息が切れそうになつた。

「オールドミスになりそうな人にとって、それは真実だわ、間違ひなく。でも、あたしはそうじゃないからね。神様の思し召しで明日になりや、あんたは無駄口を慎めばよかつたなつて、そう思うでしようよ。あたしが知りたいのはね、明日あんたが花嫁の付き添いになつてくれるかどうかってことなの。さあさあ、来てちょうだい。哀れなフランキー・ホールのために、あんなに働いて、看病して、奴隸みたいな重労働をしたあとなんだから、あんたのためになるわよ、絶対にね」

「あれは余つた仕事の一つだつたのよ」と、リビーは微笑を浮かべて言つたが、目には涙が溢れていた。「でもね、アン」と、

彼女は落ち着きを取り戻して言つた。「明日はそんなことできな
いわ。ホントにできないの」

「もう待てんわ」と、アンはほとんど無愛想とも言える口調で言つた。「あたしとボブは今日から明日へ延期したんよ、葬式のせいだね。ボブはミカエル祭(西四)の日にしようつて決めてたのに。母さんの話じや、ガチヨウの料理は明日までしか持たんそうよ。頼むから、来てちょうだい。父さんが食べ物を、ボブが飲み物を用意してくれるんだから、あたしたち、そりやもう楽しくなるわよ！ それからね、教会から戻つたあとは、二人一組になって町中を練り歩くことになつてんですつて。婦人帽には白いサテンのリボンをつけて、気に入つた居酒屋はどこだつて飲み食いするぞつて、ボブは言つとるわ。それに、披露宴のあとはダンスがあるんだつて。マーガレット・ホールも洗濯の仕事で外出しながらやいけんわよ、きつと」

「そうよ、彼女はウイルキンソン夫人の家に行かなきやならないの。そういうことなら、あたしも針仕事に行かなきやならないわ。ウイリアムズ夫人が、娘さんの冬物の準備をするように、せきたててらつしやるの。ただ、あたしはフランキーをあのままで置いて行けないわ。あたしにすがりついて離れなかつたんですからね」

「じゃあ、花嫁の付き添いにはならんのね。最終通告なのね？」

「そうなの。腹を立てないで、アン・ディイクソン」と、リビーは済まなそうに言つた。

アンは返事もせずに立ち去つていた。

リビーはしょんぼりと小さな階段を昇つて行つた。しおれていたのは、自分が親切な申し出を拒んだことは、それを受け入れることなんか道義的にできないという気持ちがほとんど分からぬ人にとって、非常に無礼に見えたに違いないと思つたからである。

リビーは部屋のドアを開けると、マーガレット・ホールが目の前のテーブルの上で聖書を開いているのに気づいた。彼女はリビーが読んでいた箇所を必死に理解しようと頭を絞つていたようだ。行の下に指を置いて、それぞれの単語の音節をつなぎ合わせながら、慰めとなる言葉を一語一語ゆっくりと大きな声で読んでいた。真剣に理解したいという彼女の気持ちは、初めて読み書きを習う時の子供のようであつた。リビーは彼女のそばの腰掛けに座つた。だが、ほどなくマーガレットは誰かが部屋に来ていたことに気づき、次のように尋ねた。

「あの人、あんたに何の用があつたんかね？ 大体の察しはつくよ。今週予定された結婚式に出てもらいたかったんじゃないだろう。そうかそうか、結婚して、笑つて、ダンスをするんじやね。あたしの息子がまだ生きとるみたいに、みんな一緒にやるがいい

さ」と、彼女は苦々しげに言つた。「まあいいさ、あの子はあんたの親類縁者じゃないんだし。じゃから、あの子のためにしてくれたことに、あたしは感謝せんといけんね。あの子が墓に入つて落ち着く間もなく、あんたが忘れちまつても、驚きやせんよ」

「彼を忘れることなんてできませんし、結婚式にも行きはしませんわ」と、リビーは静かに言つた。死んだ息子が自分の心を独占していることに対する母親の嫉妬に気づいていたからである。

「明日はウイリアムズ夫人の家で針仕事をしなくちやなりません」と、リビーは説明するように言つた。彼女は優しさと情け深さから生じる悲傷の思いを——アンの招待を断つた主たる動機である哀傷の思いを——得意そうに話していくと思われたくなかった。

「あたしも洗濯に行かなきゃならんのじや、何事もなかつたようにな」と、ホール夫人はため息をつきながら言つた。「夜になつて帰宅しても、昔だつたら階段を上がる前から、あの子の声が必ず聞こえとつたのに、今じゃひつそりして空っぽの部屋を見なきやいけんのじや。誰もあたしのことなんか、母さんつて二度と呼んでくれやせん」

倒れて泣いている彼女の姿は哀れを誘つた。しばらくリビーも自分自身の悲嘆のために口がきけなかつた。しかし、この沈黙の間に、彼女はここ何日間も築いてきた思考のアーチの頂上に要石

を置いて、意を決した。それで、マーガレットの悲しみが再び静まる。リビーは「ホールさん、できれば、あたしを——あたしをここに来させ、一緒に住ませてくれませんか?」と言つた。

視線を上げたマーガレット・ホールの顔が急に輝いたので、リビーは勢いづいて話を続けた。

「そうすれば、あなたと一緒に寝起きできるし、支払いも半分で済みますよ。夕方も一緒に過ごせますし、先に帰宅した方がもう一方の帰りを待てばいいわけです。それに——」(ここで声を落としながら)「夜になれば、あの子のことを一緒に話せますよ」このように彼女は話を続けていたが、ホール夫人が話をさえぎつた。

「まあ、リビー・マーシュ! あたしと一緒に住もうなんて本気で考えとるの? あたしだってそうしたいよ、何はさてお——いやいや、駄目じゃ! そんなことをしゃいけん。時たま、あたしがどんな人間になるか、あんたにや何も分かつとらんのだ。

腹を立てた時は気が狂つちまい、抑えられんようになっちまうんじやよ。朝は寝起きも虫の居所も悪いから、最初に会った人に癪癩玉を破裂させずにやおれんのだ。だつてね、リビー」と、彼女は悲しげな苦悶の表情を顔に浮かべて言つた。「息子は可哀想に病氣じやつたのに、あの子にさえ急に八つ当たりしてたんじやからね。そんだけでも、あたしの癪癩がどんなに手に負えんか、判

断できるじやろうが。駄目じや、来ちゃいけん。これからは、あたし、独りで生きて行かなきや」と言つた彼女の声は、低い絶望の口調になつていた。

しかしながら、リビーの決心は立派なもので揺らぐことがなかつた。「あたし、怖くありませんわ」と、彼女は笑みを浮かべて言つた。「あたし以上にあなた自身のことがよく分かつてますから、ホールさん。最近、はらわたが煮えくり返つてる時に、あなたが感情を抑えようとなさつてゐるのを見たことがありますもの。今後もずっとそうしてくださいますよ、きっと。とにかく、発作が起こつた時も、あなたは親切でしたから、たとえ少しくらい腹を立てたって、そんなことは水に流せますわ。あたしも腹を立てさせないように努力しますからね。ですから、ここに来させてください。あの子だつて、あたしたちは協調してもらいたいはずです。あなたを快適にするように最善を尽くしますから、お願いです」

「問題はあたしなんじや! 問題はあたしで、きっと向かつ腹を立てて、あなたの生活をみじめなものにしちまうわ。でなければ、神様だけが御存じじやが、あんたにくつついて絶対に離れやせんわ。あんたとあたしは世間でも他に類を見ない人間に違ひねえ。だつて、死んじまつて他に愛してくれる者が誰もおらん人間を、二人とも愛しとつたんじやから。あたしと一緒に住んでく

れるなんなら、リビー、あたしも穏やかな気質の優しい人間になるよう、これまで以上に努力するからね。ああ！ リビー・マー・シユ、あたしを試してくれるかね？」

このように、小さな墓から希望と決意の泉が湧き出て、二人にとつて生きることが共通の目標となつたのである。

* * * * *

次の日の夕方、エリザベス・マーシュが一日の仕事から帰宅すると、花嫁衣装にすっぽり身を包んだ（もうディクソンという姓ではない）アンが、父親の家で催されるダンスに参加するようになんかを説得しようと、路地の向かい側からやつて來た。

「まあ、アン、今晚もあたしのことを考えてくれるなんて、ホントに親切ね」とリビーは言いながら、彼女にキスをした。「あ

たしは行けないけど——一緒にいてあげるつてホールさんに約束しちゃつたの——あなたのこと、ずっと考へてるからね。絶対、あなたは幸せになれるわ。実は、あなたのためを選んだんだけど、小さな針箱があるのよ。ちょっと待つてね——はい、どうぞ。こんなもんで御免なさい——でも——」

「でも何？ 分かってるわよ。いい物を可哀想なフランキーに買ってやるのに、あんた、有り金すべて使つてたもんね。ホント

にいい人ね、あんたつて、リビー。この本型の針刺し、死ぬまでずっと大切にするわね。きっと、そうするわ」

こんなに友だち思いのアンを見て勇気が出たりビーは、自分の住まいが変わったこと、すなわち、今後はマーガレット・ホールと一緒に下宿するつもりであることを伝えた。

「そんなことしちゃ、絶対に駄目！ だつて、父さんも母さんも、あんたのこと、それはもう大好きなんよ。ホントの事情が家賃のことなら、下げるわよ——だからと言つて、飲食物をケチることなんかしないってことは知つてるでしょ。それに、よりによつてマーガレット・ホールと一緒に下宿するなんて！ あの人はタタール人(四五)のような女よ！ 喧嘩の相手がいなければ、自分の右手を左手と闘わせるくらいなのよ。あんたの生活は安らぎなんてなくなつちやうわ。一体全体、なぜ、そんなことを考へたの、リビー・マーシュ？」

「あたしがいないと、あの人は独りぼっちになるの」と、リビーは諭すように言つた。「時たま、少しぐらい叱られたつて、あの人を幸せにしてやることができるわ、きっと——独り暮らしをしてる時よりはね。あの人のこととは怖くないし、怒らせないよう最善を尽くすつもりよ。たぶん、ちょくちょくフランキーのことを話してやれば、あの人の心も和らぐでしょう。あなたの両親にはしょっちゅう会えるし、親切にしていただいたから、いつも

感謝してゐるわ。でもね、お二人にはあなたやメアリちゃんがいるけど、可哀想なホールさんには誰もいないの」

アンは「まあ、驚いた！」と繰り返して言うだけで、このニユースを伝えに急いで帰宅してしまつた。

しかしながら、リビーの言つたことは正しかつた。マーガレット・ホールは人間の罪を浄化する悲しみと愛という二人の天使から心の琴線に触れられて優しくなり、この近隣でガミガミ女と呼ばれていた頃とは別人になつた。そして、彼女がリビー・マーシュに愛情と敬意を示している姿を見るのは、とても楽しいことであつた。リビーの死んだ母親といえども、つい最近まで實に恐ろしげで女らしさがなかつた冷酷無情な洗濯女、マーガレット・ホールほどに彼女を優しく愛してやることはできなかつたであろう。リビー自身もまた、以前のような天涯孤独のみなしごともよそものでもなくなつた。フランキーの母親に娘として奉仕するとき、彼女の顔は安らぎの光で輝いて見え、それはもう美人の顔と言えるほどであつた。

* * * * *

読者の皆さんは、物語の教訓めいた最後の一文を、いつも読まれるだらうか？ 私は決して読まないが、かつて（一八一年

だつたと思うが）そんな一文を読むという独り暮らしの耳の悪い老婆の話を聞いたことがある。その人好きのする風変わりな習慣を彼女は子孫たちに残したかもしれないので、彼らのために、私はリビーが心の安らぎを感じた秘訣のようなもの、すなわち、ものはや彼女が天涯孤独であることに意氣消沈する必要のない本当の理由を付け加えてみよう――

彼女の人生には目的がある。その目的とは神聖なものである。

【訳注】

(一) マンチエスター中心部のピカデリー・ガーデンの東北東にある小さな通り。

(二) ディーン通りから東へ十キロほど離れた郊外（現在のランカシャー州アッシュトン・アンダーライン）にある通り。

(三) 摂氏二三・九度から二六・七度ほど。摂氏（Fahrenheit）の数式は華氏（Celsius）から三二を引いて九分の五をかける。

(四) アダムの十代目の子孫ノアは、義人ゆえに神から洪水の到来を知られ、家族と諸種の動物とともに箱船に乗り、破滅を逃れた。「創世記」六八章を参照。

(五) コールリッジが中世の魔女物語に取材した斬新な韻律の詩「クリスマス・タベル」（一八一六年）第一部の最終行からの引用。

(六) ウラギク、ハマシオン、ユウゼンギクなど、ミカエル祭の頃に咲く

植物 (Michael daisies)。

(七) サトウキビの糖液を発酵させて蒸留を繰り返した酒で、キャプテン・クックが太平洋諸島探検の際に、原住民が飲用しているのを発見した。

(八) 聖ヴァレンタインは三世紀頃のローマのキリスト教殉教者。彼は親切で優しく、貧乏人や病人を憐れみ、子供たちをかわいがつたので、小鳥までも彼に慣れ親しんだ。老境に入つて子供たちと遊べなくなると、彼らにちょっとした贈り物や愛の短信を送つたと言われる。

(九) 貧者の一灯。ほんの僅かな捧げ物だが、出す方で犠牲を払つていることが分かるもの。「マルコの福音書」一二章四二～四三節を参照。

(一〇) 一一 シリングに相当する昔の一ギニー金貨は各種の贈り物、謝礼、賞金、公共団体への出金などに用いた。

(一一) ローマ神話では神々の王で天の支配者である最高の神。雷電を武器とする光・気象現象の神。ギリシャ神話のゼウスにある。

(一一一) 手に入らないものの悪口を言って気休めにする負け惜しみのいふ。イソップ物語の「キツネとブドウ」の話を参照。

(一一一) 新約聖書の十二使徒の一人。ペテロは漁夫であったが、イエスの信頼を受けてペテロ（嚴の意）の名を与えられた。キリスト受難に際して逃亡するが、のちに回心して伝道にあたり、ネロの迫害を受けて殉教した。

(一四) マンチエスターの南西にある郊外、オールトリントンガム (Alltrincham) の西部に広がる森林公园（別名「ディア・パーク（シカ公園）」）。

(一五) ギャスケルの故郷ナッソフォードの東にある町、オールダリー・エッジのこと。ジョージ・ギッシングは父の死後この寄宿学校にやられた。町の南西に「ベア・ヒル（ウサギ丘）」というナショナル・ト

ラスト管轄の森林公園がある。

(一六) 復活祭後の第七日曜日で、スコットランドでは四季支払勘定日 (quarter days) の一つ。原義はホワイト・サンデーで、この日は洗礼が多く行われ、受洗者が白衣を着用したことから生まれた。

(一七) 両方とも昔から平和の象徴。神の人間にに対する怒りが静まつて洪水が引いたことを、ノアはオリーヴの葉っぱをくわえてハトが箱船に戻ってきたことによつて知つた。「創世記」八章一節を参照。

(一八) 第一代ダンズダウン男爵ジョージ・グランヴィル (George Granville, 1st Baron Lansdowne, 1666-1735) の悲劇『イギリスの魔法使い』(The British Enchanter, or No Magic like Love, 1705) 一二幕一場からの引用。

(一九) マンチエスターの中心を南西に走る大通り、ディーンズゲイトの南端（現在のノット・ヒル）。

(一一〇) 古い土壁の上でよく生育していくことに由来して「壁の花 (wall-flower)」と呼ばれる。花言葉は「逆境にも変わらぬ愛」。

(一一一) ギャスケルが使用した俗語は「殺害する (slay)」だが、文脈から「支払う (pay)」の意味にしかとれない。

(一一一) マカダム (John Loudon McAdam, 1756-1836) はスコットランドの技術者で、各地の道路建設を指導し、一八二七年に英國政府の道路監督長官に任せられた。

(一一一) 洋服や家具などの縁飾りに用いるウール、絹、綿などの打ち紐、組み紐、細幅の織物。

(一四) ワーズワースの哲學詩『逍遙』(The Excursion, 1814) 六編八二三行への言及。

(一五) 一匹の猫のために巨万の富を得て三度もロンドン市長になる半ば伝説的な人物、ディック・ホイッティントン (Dick Whittington) は、

エリザベス・ギャスケル作「リビー・マーシュの三つの祭日」

- (一) 貧しい少年時代に、ロンドンの街路は金が敷きつめられていると聞いて上京する。
- (二) 「詩篇」一四八章一二節からの引用。
- (三) 第三代ブリッジウォーター公爵、フランシス・エジヤー（Francis Egerton, 3rd Duke of Bridgewater, 1736-1803）は英国内陸水路の開拓者で、マンチェスター北西の町ワースリー（Worsley）ヘリヴァプールの間を結ぶブリッジウォーター運河を建設した主宰者。
- (四) 夜鶯の歌に誘われて森の中に分け入り、美の陶酔のうちに忘却を求める真情について披瀝するキーツの「夜鶯に寄す」（“Ode to a Nightingale,” 1819）四〇行への言及。
- (五) シエイクスピアの『お気に召すま』（一幕五場一行からの引用。ハーディに同名の田園恋愛小説（一八七一年）がある。
- (六) 花が大きく、色は白またはピンクで、生け垣に仕立てたり、接ぎ木の台木に使われる。
- (七) 十六～十七世紀に山野に出没した伝説上のいたずらな妖精で、アーデンの森を舞台にしたシエイクスピアの『お気に召すま』にも登場する。ロビン・グッドフェロー（Robin Hood）やホブゴブリン（Hobgoblin）の名でも呼ばれる。
- (八) 台所の煙突内に取りつけて、その上昇気流によって風車が回転して下の焼き串を回す装置。「焼き串まわしやん（oud smoke-jack）」とは工場の煙なしには機能しないマンチェスターの愛称。
- (九) 輪投げは土中に立てた鉄棒を的にして輪を投げ入れる遊戯。
- (十) 一七八〇年にロバート・レイクス（Robert Raikes）がグロスター州で開いたものに始まる。通例、毎日曜日に児童を対象として、聖書や信仰について学び、礼拝を行うために教会が開く学校。
- (一一) 五～七歳の児童を収容する義務教育の公立学校。
- (一二) ワーズワースの代表作の一「靈魂不滅の頌」（“Ode: Intimations of Immortality,” 1807）六五行からの引用。
- (一三) 幼児学校の支持者であったトマス・ビルビー（Thomas Bilby, 1794-1872）が編纂した子供のための讃美歌からの引用。
- (一四) 「われはよみがえりなり、いのちなり」「ヨハネの福音書」一一章二五節からの引用。
- (一五) 一八〇一年にロンドンで初めて実演された幻灯の仕掛けの一種で、影像が急速に近づいたり遠ざかったり、その他さまざまに変化する。
- (一六) ヨハネ福音書第一章六節および「ペテロの手紙第一」第一章二十四節からの引用。
- (一七) 人の命がはかないことを意味する。「イザヤ書」四〇章六節およぶ。
- (一八) 父親は罪悪感のために（天に対して）顔が上げられなかつたことと意味する。
- (一九) 大天使ミカエルの祝日。九月二十九日。スコットランドを除く英國では四季支払勘定日の一つ。その日にガチョウを食べる習慣がある。
- (二〇) 主としてイスラム教・シャーマニズムを信奉するロシア領内のトルコ系諸民族の総称。凶暴な人間、手に負えない人、あばれ女の人で使われる。

【作品の解説】

本邦初訳。三章構成の本短編は一八四七年六月五日、十二日、十九日に「マンチエスターの生活——リビー・マーシュの三つの祭日 (Life in Manchester: Libbie Marsh's Three Eras)」というタイトルで、週刊誌『ハウイット・ジャーナル (Howitt's Journal)』に連載された。著者のエリザベス・ギャスケルは「ローハ・マギー・ミルズ (Cotton Mather Mills, Esq.)」という筆名を使つたが、これは一六九一年のセーレム魔女裁判に関する著作 (*The Wonders of the Invisible World*, 1693) で有名なアメリカの会衆派牧師コットン・マザー (Cotton Mather, 1663-1728) と、本短篇に登場するマンチエスターの職工たちが働く綿織工場 (cotton mills) を組合せて考えた筆名であろう。ギャスケルは、ともに作家で夫婦合作の作品もあるハウイット夫妻 (William Howitt, 1792-1879; Mary Howitt, 1799-1888) と、一八四一年にドイツのライン河沿いのハイデルベルクで同宿して知り合つた。その縁で彼女は、夫妻が一八四七年一月一日に創刊した『ハウイット・ジャーナル』に、「リビー・マーシュの三つの祭日」のあとも、同年九月に「墓掘り男が見た英雄 (The Sexton's Hero)」を、翌年一月に「クリスマス、嵐のち晴れ (Christmas Storms and Sunshine)」を同じ筆名で寄稿した。